

# 水頭症事例における漢字書字習得に関する実践研究

○豊田崇仁 (茨城県立水戸飯富特別支援学校)      細川美由紀 (茨城大学教育学部)  
 KEY WORDS: 水頭症 認知特性 漢字書字

## I. 目的

本研究では、心理アセスメントの実施を通じて、水頭症のある児童の認知特性に応じた漢字書字の支援方法について検討することを目的とした。

## II. 対象児の概要

(1) 対象児: 小学校の通常学級に在籍する4年生女子児童。生後6ヶ月に水頭症、就学前に発達障害と診断された。なお、本研究の実施ならびに研究成果の発表に関しては保護者の承諾が得られている。

(2) 心理アセスメント: ベンダーゲシュタルトテスト、フロスティグ視知覚検査、WISC-IV、DN-CASの4検査をアセスメントとして用いた。その結果、対象児の強い認知能力として、言語理解や表現する能力に加え、方略使用の能力の強さが推測された。一方弱い認知能力として、視覚的推理能力や空間認知能力、ならびに注視機能・追視機能の弱さが推測された。

## III. 方法

(1) 対象漢字: 小学校1～3年生までに学習した漢字の読みの確認を行い、読みが可能であった701漢字に対して、書字のアセスメントを行った。その結果、誤答が認められた42漢字を支援対象とした。

(2) 支援内容: 支援では、以下に示す3つの課題を実施した。なお、いずれの課題とも対象児の強い認知能力である言語表現、方略使用能力を活用するため、漢字の覚え方に関する言語化を行った。  
 ①漢字パズル: 書字アセスメントにおいて全く書けなかった13漢字を対象とした。パズルによって偏やつくりなど漢字の構造の手がかりを与えることで、対象児の空間認知や目と手の協応動作の困難を補うことをねらいとした。  
 ②漢字の間違い探し: 書字アセスメントにおいて要素の付加や欠落の誤りが認められた12漢字を対象とした。線の数など、漢字の細部に注目するような3つの選択肢を設定することで、注視機能の弱さを補うことをねらいとした。  
 ③熟語の漢字探し: 書字アセスメントにおいて音読み・訓読みいずれかで誤答が認められた17漢字を対象とした。同音意義の漢字や、意味が似ている漢字の選択肢を4つ設定することで、正しい熟語の漢字を書くことをねらいとした。

(3) 確認テスト及び維持テスト: 確認テストはその日の課題終了後、維持テストは確認テストの1週間後に再度同じテストを実施した。確認テスト及び維持テストが両方正解するまで課題を繰り返した。

(4) 振り返り: その日の学習が全て終了した後、振り返りシートを用いてその日の学習を振り返り自己評価を行った。

## IV. 結果及び考察

各課題における支援効果を検討するため、それぞれの課題の1回目の確認テストと維持テストにおける正答率を図1に示す。漢字パズル課題1回目の確認テストおよび維持テストは、いずれも高い正答率を示していた。その理由として、漢字をあらかじめ構成要素に分解した漢字パズルの実施によって、対象児の空間認知の弱さを補うことが可能となったことが考えられる。また漢字パズルに加えて漢字の覚え方について言語化を行ったことも、対象児の言語表

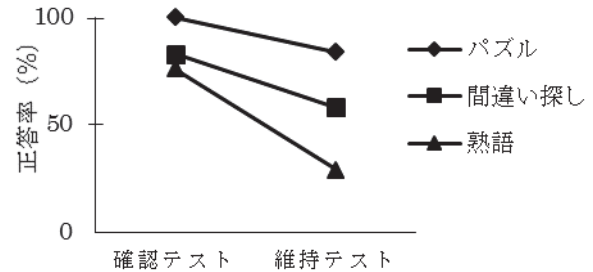


図1 1回目の確認テスト及び維持テストの正答率

現や方略使用の強さを活用することができたために高い正答率につながったのではないかと考える。

漢字の間違い探し課題は、漢字パズル課題に比べ、維持テストにおいて正答率が低下していた。その理由の1つとして、漢字全体の構造に注目する漢字パズル課題とは異なり、漢字の間違い探し課題は漢字の細部の誤りに注目を促す課題であり、注視機能の弱さが伺われた対象児にとって、負荷の高い課題であったことも推測される。しかし、1回目の確認テスト及び維持テストで誤答した漢字について、振り返りの際になぜ誤答をしてしまったかなどを報告していたことを経て、2回目に正答となった。このことから細部に注目することが困難な対象児であっても、対象児自身で誤答の理由を言語化することにより、自分自身で注目すべき点を意識化できたため、正答につながったのではないかと考えられる。

熟語の漢字探し課題では、課題実施直後の確認テスト及び維持テストにおける1回目の正答率は、他の2課題に比べて低下していた。その主な理由として、熟語の漢字探し課題より先に実施した2つの課題は、漢字の正しい字形を想起することがねらいであったのに対し、この課題では、熟語で用いられる正しい漢字を想起することがねらいであったにもかかわらず、先に実施した課題と同様に、覚えるべき漢字の字形を言語化する方略を使用したことが挙げられる。例えば対象児が「放送」を「方送」と回答する誤りがあったが、漢字の字形そのものを間違えている訳ではないため、対象児自身が間違いに気づいていない様子がみられた。そこで、2回目の課題からは、熟語の意味を言語化するように教示した。その結果、2回目以降の確認テストでは誤答数が減少したことから、漢字書字習得において熟語の意味を言語化する方略がうまく機能していたことが推測される。それでもこの課題では、維持テストにおいて、2回目のテストでも誤答となり、3回目の課題を実施する漢字も認められた。しかし、課題を3回実施した上で正答した漢字の言語化では、その内容に変化が認められた。それは単純に熟語の意味を言語化するだけでなく、日常生活で経験した事柄に即した言語化が行われていたことである。このように熟語の意味を辞書的に捉えるだけでなく、日常生活に即した形で熟語の意味を把握することにより、漢字の意味と字形をより深い処理水準で一致させることができるようになったのではないかと考える。

(TOYODA Takahito, HOSOKAWA Miyuki)